

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530239

研究課題名(和文) ジェームス・ハリントンの経済思想 英蘭の同時代共和主義者との比較の観点から

研究課題名(英文) Economic thought of James Harrington comparing with his contemporary republicans both in Britain and the Netherlands

研究代表者

竹澤 祐丈 (Takezawa, Hiroyuki)

京都大学・経済学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60362571

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：オランダ共和主義思想との比較からハリントンの経済思想の特徴を析出するために、関連する先行研究を網羅的に把握し、有意な比較作業の論点を確定した。

以上を踏まえ、第一に英国共和主義者同士の土地所有論争の再分析から、ミルトンとハリントンの対立とみられてきた論争が、ハリントン主義者への前者の批判を含蓄することを提示、第二に英国共和主義者たちの商業論が、オランダ共和主義に比して、商業の積極面を低く見積もる側面をもつという先行研究で示唆された点を、彼らの著作上の根拠を示しつつ明確に析出、第三に英国共和主義の経済思想の更なる分析には、両国に影響を与えたグロティウスやセルデンとの比較作業の重要性を示唆した。

研究成果の概要(英文)：This research intended to conduct the detailed analysis on the economic thought of James Harrington from a comparative view point between English and Dutch republicanism.

The major research findings were withdrawn. Firstly, the strong criticism articulated by John Milton in his *The ready & easy way to establish a free commonwealth, 1660*, should not be regarded as the one against Harrington, but as his implicit support for Harrington's agrarian law by eliminating damaging aspects for the landed elites which Harringtonian understandings for agrarian included. Secondly, the 'conservative' attitude of English republicans towards positive influence of commerce was re-confirmed by extensive text based discussions. Thirdly & finally, this project suggested the importance of another comparative research with Grotius and Selden, both paying heavy attention to the landed elements for social vision, for further study on the economic thought of Harrington's and other fellow English republicans.

研究分野：経済学

科研費の分科・細目：経済学説・経済思想

キーワード：ハリントン 英国共和主義思想 オランダ共和主義思想 デ・ラ・クール兄弟 プロパティ論 土地所有 ジョン・ミルトン ハリントン主義者

### 1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで、アダム・スミスの社会科学体系における共和主義的要素の検討を長期的課題として念頭に置きながら、ハリントンの思想的特徴を把握する研究を遂行してきた。それは以下の状況判断に基づく。すなわち J.G.A. Pocock や田中秀夫の研究、*Wealth & Virtue* (Cambridge, 1983)の成果などにより、17世紀英国共和主義思想がスミスを含むスコットランド啓蒙思想に多大な影響を与えたことは通説になりつつあるが、その影響の程度と様相に関しては議論が分かれている。

そこで、申請者は、本申請書の「研究業績」欄に記載した論考や数々の口頭発表によって、17世紀共和主義思想の解明により上記の論争に寄与すべく努力を重ねてきた。また、英語圏の研究者たちも、彼ら独自の問題関心から、17世紀共和主義思想の分析に労力を投じてきた。以上の成果により、近世英国共和主義思想の内実はかなり程度解明されてきたと言える。

しかし上記のような共和主義思想全般の解明の程度と同等に、個別トピックの分析が進展したわけではない。申請者が注目するのは、近世共和主義思想家の経済思想や商業観についてである。このテーマは、ハリントンを中心的素材として、かつてはH. HillやR.H. Tawneyなどによって、資本主義の黎明期やブルジョア革命としての17世紀半ばの歴史的特徴を示すことを主眼としてジェントリ論やイギリス革命論のなかで盛んに議論されたが、Pocock, *The Ancient constitution and the feudal law* (revised ed., Cambridge, 1987)以降は、その経済論の独自の意義を見出すというよりは、むしろ政治論への従属的性格が強調される傾向にあり、結果として研究テーマとしては等閑視されがちである。つまり、近世英国の共和主義思想家の経済思想に関して、近年の共和主義思想全般の到達点を踏まえる形での研究が十分におこなわれているとは言いがたいのである

もっともこの問題についての論考が全く存在しないわけではない。例えば、S. Pincus, *Protestantism and Patriotism: Ideologies and the Making of English Foreign Policy 1650-1668* (Cambridge, 1996)、J.H. Scott, *England's Troubles: 17th-Century English Political Instability in European Context* (Cambridge, 2000)、idem., *Commonwealth principles: republican writing of the English revolution* (Cambridge, 2004) など

が該当する。これらは、共和主義概念が現代の研究水準からみるとやや曖昧であったり、経済思想の独自性の析出が弱かったり、あるいは、18世紀の共和主義思想の様相分析に重点を置く形で議論を展開していたりする。つまりこれらの先行研究によって、17世紀の共和政論において商業論や経済論が重要な位置を占めたこと、そして、それらの議論が、18世紀の経済学の形成へ多大な影響を与えたことが改めて確認されたものの、ハリントンを含む17世紀の個々の共和主義者の経済的議論の特徴は、いまだ不十分にしか分析されていない。

そこで本研究は、近年の共和主義研究の進展を踏まえ、古くて新しいテーマであるハリントンの経済思想の全体像を、再び分析・素描することを主たる課題とする。

### 2. 研究の目的

本研究は、同時代の英蘭の共和主義者 M. Nedham や De la Court 兄弟の議論と対照させつつハリントンの著作を読み直すというこれまでにない接近法によって、彼の経済思想の解明をおこなう。つまり、かつてのジェントリ論争のような外在的理解の呪縛からハリントンの経済思想を解き放ち、それが依然として発展性のあるテーマであることを確認しつつ、近年の共和主義研究の進展の知見を生かして再び分析し直すことにより、その特徴と意義をさらに明確化する。

### 3. 研究の方法

その経済思想に限らずハリントン研究全般は、論点の無自覚的蒸し返しや、政治思想史家と社会思想史家とが別々のハリントン研究史を形成するなど、論点のかみ合った生産的な議論が行われているとは言いがたい。そのような状況の下で、何の方法論的指針を持たずにハリントンの経済思想を再び分析すると主張することは、あまりにナイーブであると思われる。

そこで本研究は、具体的に次の観点から、ハリントンの経済思想の読み直しをおこないたい。それは、**英蘭の同時代共和主義者との比較の観点**である。なぜ比較の観点が必要なのか。

基準的研究となる英米共和主義解釈を示した Pocock は、古典古代からの共和主義思想の(誤解を含む)**受容史**を、17世紀英国を中心に描き出しつつ、**土地の所有に強調点**を持つハリントンの経済思想を、**英国特有の理**

**解のあり方(代表例)**と解した。すなわち彼によれば、古典古代からの共和主義思想には(商業的富を含む)所有一般と政治的代表的の問題を関連付ける発想があるが、ハリントンは土地所有にのみ着目する。この点をポーコックは、ハリントンが、同時代の「ジェントリの勃興」よりはむしろ、封建制度の崩壊を認識しつつその前提下で政治的主体を取出すための議論をおこなう思想家と解した。そしてハリントンの土地への拘りをブルジョア社会の擁護者の証左とする研究が、同時代の現象をハリントンがいかに知り得たのかに関する分析を欠く、現代からの遡及的解釈の弊害を持つ点も説得的に示した。しかしハリントンを英国共和主義思想の代表例とするポーコックの解釈には、**同時代の英国共和主義者におけるハリントンの特異性**を強調する C.J. Davis や Scott が近年批判をおこなっている。この問題提起を踏まえ彼の経済思想の特徴と意味を把握するためには、**同時代の共和主義者との比較の中での検討が必要**になる。

本研究では、まず英国の同時代者として、**interest 論などの経済関係の著作を多数著す M. Nedham**、加えて、(英国の共和主義思想に比べて)**商業的富による共和政として同時代人に広く認識された 17 世紀オランダにおける共和主義者 De la Court 兄弟**の議論と比較しつつ、ハリントンの経済思想および土地所有論の特徴を析出する。西洋史の知見によれば、オランダをライヴァル視する議論は、J. Milton など他の共和主義者をも含む 17 世紀英国に見られる一般的特徴であるが、ハリントンと De la Court 兄弟とを比較する利点は、同時代共和主義者という外在的特徴の類似だけではなく、**彼らの直接的な思想交流の存在**にもある。直接的な思想交流の分析をも加味しつつ彼らの経済思想を比較することは、英蘭の思想交流の観点からハリントンの独自性がより明瞭になるので、重要な意義があると考えられる。その際、(共和主義者の経済思想に焦点はないが)英蘭比較を部分的に含む、定評ある先行研究である、Eco Haitisma Mulier, *The myth of Venice and Dutch republican thought in the 17th century* (Assen: the Netherlands, 1980) や Scott (上述)を参照する。

上記の観点からの研究を進める到達目標は、既存のハリントン研究において論及されつつも必ずしも明確に把握されてこなかった二つの概念、すなわち property 論(と土地均分相続法 agrarian law)と interest 論

についての、よりの確で明快な解釈を提示しつつ、ハリントンの経済思想全体の構造を明らかにする。前者に関しては、property の所有者の変化がどのように把握され、それがハリントンの政治的主体の議論や歴史変動認識とどのような連関を持つのか、後者に関しては、重要文献である J.A.W. Gunn, *Politics and the public interest in the 17th century* (London, 1969)などを参照しつつ、ハリントンにおける個別善と共通善(共同善)の関係付けの様相を分析する。またこの分析結果を元に、18 世紀を主たる素材に interest 論の意義を見る A. Hirschman 説の 17 世紀への適用可能性に関する考察をなすうると考えられるので、経済学史への貢献の可能性もあると考えられる。

#### 4. 研究成果

(1)ハリントンの経済思想に関する先行研究を網羅的に把握し、「利益」と「財産・所有」に関する解釈の分岐点の確認と、そのテキスト上の根拠の妥当性を再検討した。その結果、それらの外在的解釈が根拠とするハリントンのテキスト上の箇所にはある種の傾向性と偏りが存在する点を明確に把握した。  
(2)オランダ共和主義思想とデ・ラ・クール兄弟に関する先行研究を把握し、英国共和主義思想との有意な比較作業のための論点を確定した。  
(3)ハリントンの土地観を示す土地法に対する批判と従来はみなされてきたミルトンの議論が、むしろ、ハリントンの土地法をより急進化する内容を持つ、ハリントン主義者のそれに対する批判であったことを示した。  
(4)ニーダム、ミルトン、そしてハリントンなどの英国共和主義者たちの商業論は、同時代のオランダ共和主義者のそれと比較すると、商業の積極面をかなり低く見積もる「保守的」な側面を持つというこれまで先行研究で示唆されてきたことを、彼らのテキスト上の根拠を示しつつ、明確に析出した。  
(5)ハリントンを中心とする英国共和主義者の経済思想をさらに詳細に分析するためには、より前の時代に活躍した思想家たちで、ニーダム、ミルトン、そしてハリントンがそれぞれの著作において何度も言及する思想家、例えば、オランダと英国の双方に影響を与えたグロティウスやセルデンのそれとの比較作業が重要になることを示した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

竹澤祐丈、「ハリントンの統治機構論に対するジョン・ミルトンの批判(3・完)

17世紀イングランド共和主義思想の統一性と多様性の一側面」、『経済論叢』、第188巻第2号、2014年、査読なし、1-13頁。

竹澤祐丈、「ハリントンの統治機構論に対するジョン・ミルトンの批判(2)

17世紀イングランド共和主義思想の統一性と多様性の一側面」、『経済論叢』、第188巻第1号、2014年、査読なし、29-41頁。

竹澤祐丈、「ハリントンの統治機構論に対するジョン・ミルトンの批判(1)

17世紀イングランド共和主義思想の統一性と多様性の一側面」、『経済論叢』、第187巻第4号、2014年、査読なし、25-40頁。

竹澤祐丈、「(依頼論文)ハリントンを中心とする近世共和主義思想に関する研究動向とその展望」、『イギリス哲学研究』、第35号、2012年、査読なし、125-139頁。

〔学会発表〕(計 3件)

竹澤祐丈、「(招待講演)ハリントンにおける正義に基づいた民衆統治とデモクラシーのあわい(シンポジウム「イギリスにおける「正義」の諸相」)」、日本イギリス哲学会研究大会、2012年3月27日、国際基督教大学。

竹澤祐丈、「近世英国共和主義思想における人的ネットワークについて 王朝交代とハリントン家の関係を中心に」、『日本イギリス哲学会関西西部会例会、2011年12月3日、キャンパスプラザ京都。

竹澤祐丈、「(招待講演)ハリントンが語ったこと、そして語らなかったこと 土地所有、君主政、内乱(シンポジウム「ピューリタン革命」再考)」、日本ピューリタニズム学会研究大会、2011年6月18日、聖学院大学。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

竹澤 祐丈 (Takezawa, Hiroyuki)  
京都大学大学院経済学研究科・准教授  
研究者番号：60362571